

小児科医の役割

前橋協立病院小児科医 深澤 尚伊
無料学習支援「ひろせ川教室」

子どもの味方になれるのは小児科医

「共同研究者」という役割が、私に相応しいとも思えないが、今、関心の高い領域で他職種の方々と意見交換しながら、次の一歩を出せるなら、魅力的な作業かもしれないと、身の程知らずにも引き受けてしまいました。

1978年に、小児科医として仕事を始め、現場で直接指導していただいた鈴木政子先生のほかにも、私が勝手に指導医と決めつけて（というのは、言葉や文章にして「指導医になってください」とお願いしたわけでは無い、ということですが）、小児科医としての心得を学んだのは、前橋市で開業されていた（故）由上修三先生、滋賀県で重度心身障害児（者）施設の園長をされていた高谷清先生でした。

今回、「ぐんま教育文化フォーラム」と関わりを持ち始めたのは、子どもの貧困問題での、無料学習支援活動に関わるようになったからです。このことは由上先生の「徹底的にこどもの味方になれるのは小児科医だよ」という言葉でした。親・保護者・教師など多くの人々に囲まれながら子どもは育っていくのに、なぜ？小児科医？と思いましたが、その後の自分の経験を重ねる中で、その意味を理解することができました。

あるケースから

私の関わった子どもの中には、不登校・登校禁止・家出・万引きなどという一人で全部経験した子もいて、それを母親一人が対応して疲れ切っている、というケースがありました。自分の事をわかってくれるのは友達しかいない、とその集団の中にいる

ことが、その子にとって、気持ちの安らぐ唯一の場所だったのかもしれませんが。親や世間から見たら「不良グループ」に関わるな、と言いたくなるかもしれない。でも「お前が悪いのじゃない」と言ってくれるのは、友達だけだったのです。



おやつ問題を考える

深刻な問題にもかかわらず姿を見せない父親との意見交換のため、家庭訪問をすることを通告しました。仕事の関係で、父親が帰宅するのは、毎晩10時過ぎで、父親と子どもが話をするタイミングを見つけるのは大変です。家庭訪問の日は、会社に頼んで早退してもらいました。ところが、訪問をした日に、私が見た光景は、予想を完全に裏切っていました。寒い日でしたが、笑顔でくつろぐ父子の姿が、そこにあったのです。なんだ、心配しすぎだったのか？その理由は、すぐにわかりました。実は、このお父さん、家庭訪問があることを知って、前日も、この日と同じように、勤務の変更をしてもらって、この子と、いろいろ話をしたのだそうです。友達と行動を共にし、友達の家泊まることが続くようになり、家にも帰りづらくなり、お小遣いもなくなり、コンビニで万引きをし、警察から両親が呼ばれて……。この子の辛さが、父親

にも伝わってからは、母親も気持ちが楽になり、本人もよって立つ基盤ができたことで、中学卒業後、仕事では頑張りながら、通院を続けています。体のあちこちにあるピアスも彼の自己主張だと思えば、その笑顔を見るだけで、関わってよかった、という気持ちになります。

「見えない」子どもの貧困

今、子ども達の6人に一人は貧困家庭で生活しているとされ、特に離婚などで片親で育てられている子どもが多いということです。都会も田舎も、道路は舗装され、高層建築は私の住む玉村町でも見られ、経済大国と言われる日本で、そのようなニュースは、俄かには実感がわきませんでした。皮相的な統計の取り方をすると、そのような数字がでるのかもしれない、程度に受け取っていたかもしれません。

でも、自分の目の前にいる子ども達や保護者達をみていると、現実が見えにくいというのが実感です。昨年2016年2月から開始した「無料学習支援」に関わったスタッフの最初の感想は、「みえない」に類する言葉が多いのです。子ども達も、保護者も身なりはしっかりしているし、所有しているものもブランド品であったりします。



ひろせ川教室にて

学習支援を通じて理解の深まり

子ども達と付き合い始めて、初めの頃は、こちらが傷つきそうな、優しさを感じられない言葉も、たくさん投げつけられながら、

でも「本音」なのかなぁ、と思ったりしました。このような会話が、学校の中で普通に交わされているのだろうか？時々、イベントをしたりすると、普段と違う顔や行動が見られ、これも子どもを把握するのに有意義で、私たちが、子どもを心から信頼でき、愛おしく思う機会になっています。

保護者との話し合いの機会も定期的に設けるようになって、徐々に私たちの現実社会への理解度も深まってきていると思います。

応援している大人の存在を伝えたい

他の、こども支援団体との交流機会も、最近が増えてきました。大人の社会も捨てたもんじゃない、と思います。アンテナを伸ばせばあらゆるところに、大人の責任を果たそうとしている人々がいます。私たちの活動も、まだまだ対象となる子ども達のほんの一部。もっともっと広がっていかなくてはいけない。そして、何よりも、応援している大人たちがいるということ、子ども達に伝えきらなければ。多くの子ども支援のNPO団体が、課題の一つに挙げているのが、対象となる子どもは「どこにいるの？」です。個人情報だから教えられない、というのは間違っていないでしょう。でも、貧困問題は福祉の仕事と、言い切ってしまうのには違和感を感じます。

行政の福祉と教育が共同して

最近では、行政の関わりも出てくるようになり、大事な事だと思っています。大泉町では、行政の方から、福祉と教育分野の担当が共同して、子どもの貧困問題に立ち向かっています。今後、私たちは受け皿作りをさらに広げながらも、行政が教育と福祉が一緒になってこの問題に取り組んでくれるよう、働きかけてゆきたいと考えています。